

教職大学院1年生は、長期実習で何を学んだか！

教職大学院2年生の「学び」については、第11号(H28.8月発行)に「教職大学院での学びとは何か」「何を手に入れたか」総括した短文を掲載しました。今回は、1年生に長期実習を通して「何を学んだか」振り返ってもらいました。連携協力実習校及び附属小・中学校の教職員の皆様には、大変お世話になり、心から感謝申し上げます。(文責:石嶋和夫)

大学院生名	教育実践プロジェクトⅠや長期インターンシップを通して「何を学んだか」
赤木 由喜 (現職院生)	連携協力実習校に入り、改めて特別支援のニーズの強さを感じました。子どもの求める支援と教職員からの手立てをうまく機能させ、「楽しい。勉強してよかった。」とどの子も感じられるような支援のあり方を、日々考えています。
荒井 雄貴 (学卒院生)	授業を観察するときと授業を行うときでは、生徒の様子見え方が変わることが実感できました。観察で得ることができた生徒の様子を活かし、授業では生徒の反応をより多く取り上げることができるようにしていきたいです。
印南 竜彦 (現職院生)	連携協力実習校での日々の実践研究を通して、「理論と実践の往還」の大切さを改めて実感することができました。先生方の温かな配慮、実践研究への理解、共に学び合えることに感謝いたします。
内田 祥弘 (現職院生)	先生方が、私を一職員のごとく温かく迎えてくださいました。子どものことを第一に考え、日々情熱をもって向き合っている姿に感謝し「人が人をつくる」のだということを改めて気づかせてくださいました。
大武 徹哉 (学卒院生)	子どもたちと過ごす時間が改めて楽しいことに気づかされました。同じクラスで約3か月過ごし、多くの経験を共有してきました。その中で先生と子どもの関わり方が、とても深い学びとなっていることを実感しています。
大森 一久 (現職院生)	連携協力実習校が在籍校ということで、今まで見えていたものから改めて学ぶ面と、第三者的立場として客観的視点から研究のための課題を新たに発見できた両面があり、多くの方々の協力で大変有意義な研究になりました。
金井 司 (現職院生)	相手を理解し、相手に理解される。双方向の理解の大切さを感じました。自分の研究は何をしていて、どんなことを考えているのか、実習校の先生方、生徒と共有していくことが、活動を円滑に進めるうえで大切だと考えました。
久我 逸就 (現職院生)	これまでにない第三者としての立場で、連携協力実習校に関わらせていただいたおかげで、自分自身が行ってきた実践を振り返るとともに、凝り固まった教育観をデトックスする良い機会となりました。
小林 祐輝 (学卒院生)	連携協力実習校では、改めて、授業や学級経営、学校や教職員全体での連携などで、子ども達にとって、何が一番良いことなのかを絶えず考えて、それを実践していくことの大切さを学びました。
金野 大晟 (学卒院生)	授業では「子どもの姿から」を合言葉に理論を学びました。教師が多くの引き出しを持ち、子どもの目線から授業をデザインしていくことが重要であることを、実践を通して実感しました。
齋藤 勝巳 (現職院生)	学んだ理論をもとに、連携協力実習校では、子どもの姿を丁寧に見取り、一人一人に寄り添う教育実践をめざしています。実習校での活動を省察する中で、多くの気づきがあり、視野を広げて教育を考えることができました。
齊藤 雄輔 (現職院生)	「教育の専門家として育ち合う」同僚性の高め合いを旨とし、授業や授業研究会において、連携協力実習校の先生方や生徒と多くの時間を共有できました。今後もさらに広めていきたいと考えています。
関 敦巳 (現職院生)	小学校での出前授業をさせていただき、先生方のきめ細やかなご指導と、児童の自由な発想力に驚かされました。図画工作の「楽しい」を中学校での学びにつなげていくために、今後も実践研究していこうと思います。
高橋 裕子 (学卒院生)	児童理解の大切さを実感し、子どもの真の姿や思いを理解することは、その子にとって本当に必要な支援につながると学びました。子どもに寄り添いながら一人一人と丁寧にかかわることのできる教員を目指したいです。
田中 真也 (現職院生)	「論理的思考」という視点で授業を観察・実践しました。使う言葉を大切にしたり、「いつでも〇〇と言えるのか」と発問したりすることが、論理的に考えるきっかけになり得ることが分かりました。
中田 陽平 (学卒院生)	「子どもの道徳性の育成」をテーマに観察・実践をさせていただきました。学部で行う教育実習とは違った形での実習を行うことで、一歩引いた目線から教育を考えられる良い機会になりました。
仁平 由美 (現職院生)	校長先生の急逝という悲しい出来事を乗り越え、副校長先生のリーダーシップの下、「子どものために」と児童理解や授業力の向上などに協働的に取り組む「チームMine」の姿が素晴らしく、大変勉強になりました。
野澤 不ずえ (学卒院生)	子どもの興味を喚起する工夫は、声によるものに限らず、多岐にわたると改めて気付きました。教材と生徒の距離を近づけるインタラクションの工夫等、子どもたち一人一人の顔を思い浮かべる教材研究を努めてまいります。

「教員の養成・採用・研修の制度変革」 教育実践高度化専攻准教授 小野瀬 善行

中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(2015年12月)を受け、2016年11月に教育公務員特例法が改正されました。これにより、国が「教員育成指針」を策定すること、それに基づき都道府県や市が「指標」や「教員研修計画」を策定すること、各都道府県に教育委員会と大学などで組織する「教員育成協議会」の設置すること、以上のことなどが求められることになりました。さらに10年経験者研修が廃止され、代わりに「中堅教諭等資質向上研修」が導入されることになっています。

これらは教員の養成・採用・研修をより一体的に行うことを企図した改革であり、教育委員会と大学がそれぞれの役割を担えば、(予定調和的に)教員の資質向上が図れるだろうという認識を問うものです。このような改革に対し、一部の研究者からは、今後策定される「指針」が各地域の独自性や各大学の裁量や自主性・自立性を保証するものとなるのか、「指標」等が単なる目標の羅列や教員の人事評価に直結するものとならないかといった懸念が指摘されています。このような点は確かに注視が必要でしょう。

他方、同答申の副題にあるように、これからの教員の学びと成長にとって「学び合い、高め合う」コミュニティの存在はとても重要なものになると考えます。学校の抱える課題は多様で複雑であり、個々の教員の努力や学びで乗り越えるのは大変に難しくなっています。学校の先生方が共に「学び合い、高め合う」ために、教育委員会と学校、そして大学(もちろん教職大学院も含めて)はどのような連携や協働が必要なのかが改めて問われる制度変革といえそうです。

《シリーズ:教職大学院授業紹介⑮ 「理科授業デザイン論」(選択科目[平成29年度以降後期])》

「理科で学習することは、将来の生活に必要ですか?」などの疑問を子どもから受けることがあります。この疑問に対して適切な答えを探すことはむずかしそうに思えるかも知れません。しかし、「理科が教科のひとつとして位置づけられている理由は何か」、「理科の目的は何か」という問いを立て、考えていくと、それが先の疑問への答えになります。

理科のねらいは、基礎的な知識、科学的な思考、観察・実験を行う技能などの観点から構成されています。では、理科授業をデザインする上での根幹は何でしょうか。それは問題解決学習です。その過程はおおよそ、①事象に対して疑問をもち、問いの形にする、②問いに対する答えを予想する、③予想を検証するために、観察や実験の計画を立てる、④観察や実験を行う、⑤結果をまとめる、⑥予想と結果を照らして考察する、⑦問いに対する答えをまとめる、という流れになります。



これらの流れを学習単位の中でどのように組み立てるのか、各過程での指導上の留意点は何か、などを本授業で議論しています。そのほかに、学習内容の系統性、理科授業を支える学習論、科学概念の形成などのテーマも取り上げています。

授業では具体的な教材を使い、学習者(子ども)の立場になって学ぶ機会を含めるようにしています。観察や実験を含む一連の学習過程を通して知識や技能をどう用いるのか、班で話し合うとはどういうことか、などに気付いてもらいたいからです。

私は、「理科授業で大切なことは何か」という質問を受けると、「自然事象に対する子どもの驚きや素朴な疑問にしっかり寄り添って、疑問と一緒に解き明かしていく姿勢」と答えます。授業の技術を獲得すると同時に、そのような姿勢(構え)を身に付けてほしいと思っています。

(担当:人見久城)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻(教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。